

仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。

期間雇用社員と希望者全員の正社員化を。

めげず、均等待遇、なぐさう差別！ユニオンは労使法裁判に勝利するぞ！

# 希望をもって正しく生きる

# 未来



全労協・郵政産業労働者ユニオン長崎中郵支部  
機関紙・「みらい」  
NO. 4214  
'22年1月1日(土)  
Tel・Fax 095-828-1953



謹賀新年。

希望こそ人類の光である。ギリシヤ神話の「パンドラの箱」で、人類初の女性が、禁忌を破って箱を開けると、様々な災いが飛び出す。これに驚き、慌てて箱を閉じるが、そのとき箱の中には唯一「希望」のみが残り、そこで人は

希望を持つことできる。

新年が明けた。

今年希望をもって生きる、一年にぜひしたい。

しかし、思いだけでは人は生きられない。衣食足りて人は礼節を知る、からだ。

職場を見る。

みんな精いっぱい働いているが、今日の処遇には不満があり、明日への希望は暗い。

一つは非正規雇用だ。まじめに働いても正社員化は絶望に近い。不条理の極みだ。

二つは格差解消、待遇改善を最高裁から命じられた郵政だが、正社員の権利に攻撃をかけ、格差隠しに懸命だ。総体として会社は社員の働きに報いていない。

国全体ではどうか。労働者の四割の非正規雇用を三〇年も続ける国と会社は、労働者・国民の所得・実質賃金を減らし続け、労働者だけでなく、国の成長までも低下させ、昨年、国民総生産比で、ついに韓国、台湾にも逆転された。日本の労働者は極東アジアでも貧しい存在となった。

百年前の日本は大正デモクラシーの時代だった。自由と普通選挙法を求める国民のたたかいがおき、おからのユメ騒動という大衆の反乱で、

明治以来続いた薩長の藩閥政治が倒れ、初の平民出身の原敬が首相となる。しかし彼は無念にも東京駅頭で暗殺され、政党政治も揺らぎ、民主主義は崩壊し、時代は暗転し、世界経済の大恐慌が第二次世界大戦を引き起こす。

当時の話だ。

希望と真反対の薄幸の歌人・石川啄木

は、一九〇九(明治四十二年)の元旦の日記に、「空は晴れて

いるが、一杯の酒に雑煮、年始状を見て、北海の母へ手紙を書く。予はその中で、『今年が予の一生にとって最も大事な年』である、と書き、正月の小遣いを「円同封」と書いている。

彼は短い生涯ながら多くの歌を作るが、「希望」の歌はあまりない。時代の反映だが、強いてあげれば、「新しき明日の来るを信じず」という、自分の言葉に嘘はなければ」と、未来を信じる自分を励ます、と歌を読む。

また元旦の歌では「なんとなく、今年が良いことある」とし。元旦の朝、晴れて風なし」とも明日に期待する歌を詠む。

啄木は時代の暗さのなかに、わずかな希望をもって、



正しく、大事に生きること、元旦に誓っている。希望は自分のうちにあるのだ。

今だ。

民主主義の原点は選挙である。昨年一〇月の総選挙では、野党共闘での政権交代はなら

なかった。しかし

現実には共闘なしには自公政権を倒せないのは明白であり、今年七月には参議院選挙がある。

ここでの勝利は政権交代への足掛かりになる。ぜひ野党統一でたたかってもらいたい。

この一〇年の安部・国家主義が、コロナ対策の不手際から退陣し、昨年一〇月、看板を塗り替えた自民党が岸田首相で総選挙を制したが、自公政権を行うことは、望み薄だ。なぜなら、このつらい新自由主義の三〇年の政治こそ自公政権だったからだ。

世界だ。だが世界中を見ても、この新自由主義の政治、経済は転換期にある。一部の富裕層が先に豊かになり、その余韻が、低所得層へとしたり落ちる。トリクルダウンが、おこら



これを働く人のための政治、経済、社会へと変えていく運動を、労働者自身が展開する。その変わり目の「希望の年」は二〇二二年である。

私たちは労働組合

だ。弱い人たちが団結し、強く生き、たたかう手段を持っている。しっかりとたかえば、きつと明るい明日は必ず来るし、

コロナものりこえることができる。がんばろう、仲間たち。

二〇二二年一月一日  
郵政ユニオン長崎中郵支部  
執行委員会&組合員一同

期間雇用パート労働者の皆さん! 困りごとは職場の郵政ユニオンへご相談を。

1集-海江田, 2集-向井, 3集-山田, 支部・分会の役員へ。